

1. 私たちはバシヤンへの道を上って行った。するとバシヤンの王オグとそのすべての民は、エデレイで私たちを迎えて戦うために出て来た。
2. そのとき、主は私に仰せられた。「彼を恐れてはならない。わたしは、彼と、そのすべての民と、その地とを、あなたの手に渡している。あなたはヘシュボンに住んでいたエモリ人の王シホンにしたように、彼にしなければならぬ。」
3. こうして私たちの神、主は、バシヤンの王オグとそのすべての民をも、私たちの手に渡されたので、私たちはこれを打ち殺して、ひとりの生存者をも残さなかった。
4. そのとき、私たちは彼の町々をことごとく攻め取った。私たちが取らなかった町は一つもなかった。取った町は六十、アルゴブの全地域であって、バシヤンのオグの王国であった。
5. これらはみな、高い城壁と門とかんぬきのある要害の町々であった。このほかに、城壁のない町々が非常に多くあった。
6. 私たちはヘシュボンの王シホンにしたように、これらを聖絶した。そのすべての町々——男、女および子ども——を聖絶した。
7. ただし、すべての家畜と、私たちが取った町々で略奪した物とは私たちのものとした。
8. このようにして、そのとき、私たちは、ふたりのエモリ人の王の手から、ヨルダンの向こうの地を、アルノン川からヘルモン山まで取った。
9. ——シドン人はヘルモンをシルヨンと呼び、エモリ人はこれをセニルと呼んでいる。——
10. すなわち、高原のすべての町、ギルアデの全土、バシヤンの全土、サルカおよびエデレイまでのバシヤンのオグの王国の町々である。
11. ——バシヤンの王オグだけが、レファイムの生存者として残っていた。見よ。彼の寝台は鉄の寝台、それはアモン人のラバにあるではないか。その長さは、規準のキュビトで九キュビト、その幅は四キュビトである。——
12. この地を、私たちは、そのとき、占領した。アルノン川のほとりのアロエルの一部と、ギルアデの山地の半分と、その町々を私はルベン人とガド人とに与えた。
13. ギルアデの残り、オグの王国であったバシヤンの全土とは、マナセの半部族に与えた。それはアルゴブの全地域で、そのバシヤンの全土はレファイムの国と呼ばれている。
14. マナセの子ヤイルは、ゲシュル人とマアカ人との境界までのアルゴブの全地域を取り、自分の名にちなんで、バシヤンをハボテ・ヤイルと名づけて、今日に至っている。
15. マキルには私はギルアデを与えた。
16. ルベン人とガド人には、ギルアデからアルノン川の、国境にあたる川の真中まで、またアモン人の国境ヤボク川までを与えた。
17. またアラバをも与えた。それはヨルダンを境界として、キネレテからアラバの海、すなわち、東のほうのピスガの傾斜地のふもとにある塩の海までであった。
18. 私はそのとき、あなたがたに命じて言った。「あなたがたの神、主は、あなたがたがこの地を所有するように、あなたがたに与えられた。しかし、勇士たちはみな武装して、同族、イスラエル人の先に立って渡って行かなければならぬ。」

19. ただし、あなたがたの妻と子どもと家畜は、私が与えた町々とどまってもよい。私はあなたがたが家畜を多く持っているのを知っている。
20. 主があなたがたと同じように、あなたがたの同族に安住の地を与え、彼らもまた、ヨルダンの向こうで、あなたがたの神、主が与えようとしておられる地を所有するようになったなら、そのとき、あなたがたは、おのおの私が与えた自分の所有地に帰ることができる。」
21. 私は、そのとき、ヨシュアに命じて言った。「あなたは、あなたがたの神、主が、これらふたりの王になされたすべてのことをその目を見た。主はあなたがたがこれから渡って行くすべての国々にも、同じようにされる。
22. 彼らを恐れてはならない。あなたがたのために戦われるのはあなたがたの神、主であるからだ。」
23. 私は、そのとき、主に懇願して言った。
24. 「神、主よ。あなたの偉大さと、あなたの力強い御手とを、あなたはこのしもべに示し始められました。あなたのわざ、あなたの力あるわざのようなことのできる神が、天、あるいは地にあるでしょうか。
25. どうか、私に、渡って行って、ヨルダンの向こうにある良い地、あの良い山地、およびレバノンを見させてください。」
26. しかし主は、あなたがたのために私を怒り、私の願いを聞き入れてくださらなかった。そして主は私に言われた。「もう十分だ。このことについては、もう二度とわたしに言ってはならない。
27. ピスガの頂に登って、目を上げて西、北、南、東を見よ。あなたのその目でよく見よ。あなたはこのヨルダンを渡ることができないからだ。
28. ヨシュアに命じ、彼を力づけ、彼を励ませ。彼はこの民の先に立って渡って行き、あなたの見るあの地を彼らに受け継がせるであろう。」
29. こうして私たちはベテ・ペオルの近くの谷にとどまっていた。

説教

申命記3章は、カナン地・ヨルダン川の手前にあるエモリ人の土地をイスラエルが占領するに至った経緯と、モーセ自身のカナン入りをめぐる神とのやりとりを、モーセが回想する場面です。

本来、イスラエルが神から相続することを約束された土地は、ヨルダンの向こう（西側）にあるカナン人の住む土地です。でも、2章で見たように、行く手を阻むヘシュボンの王シホンと対決して、その王国を占領することになります。そして続く3章の初めでは、バシヤンの王オグがシホンと同様にイスラエルを「迎えて戦うために出て来た」ので、これと対決して、その地を占領することとなります。こうしてイスラエルは、本命のカナンを征服する前に、ヨルダン川の手前、東側にある周辺諸国も占領することになります。この国は決して弱い国ではなく、むしろ鉄を使いこなす最新の文明を備え、「高い城壁」も備えた「要害の町々」です。おまけに背の高い巨人でもありました。バシヤンの王オグの寝る鉄の寝台の長さが9キュビトで、メートルに換算すると約4メートルにもなります。そこから推定して3メートル近い身長ではなかったかと思われまます。格闘家のチェホンマンは218cm、近年最も背の高かった人は272cmと言われますが、それと同様か、それ以上だったかも知れません。場所は違いますが、カデシュ・バルネアでカナンを偵察した斥候隊は、「その地に住む民は力強く、その町々は城壁を持ち、非常に大きく」、「その住民を食い尽くす地だ。私たちがそこで見た民はみな、背の高い者たちだ」と報告しました(民数記

13:28,32)。その恐怖に怖じ気づいて、神の約束を信じない不信仰に陥ったのですが、今回は違います。次世代は、先人の不信仰な「恐れ」を乗り越えてバシヤンの王オグを破り、その地を占領しました(申命記 3:12)。

占領した地は、ルベン族とガド族とマナセの半部族に与えられます(12-17)。ただし繰り返しますが、そこはあくまでヨルダン川の手前であって、カナンではありません。こんな所で安住して、カナン入りを放棄することは許されません。そんなことをすれば、あの四十年前の不信仰を繰り返して、また再び「荒野の四十年」を過ごさなければならなくなります。そこでモーセは、三部族に、家族と家畜はここに留まることを許可すると同時に、彼らうち戦える「勇士たちはみな武装して、同族、イスラエルの先に立って渡って行かなければならない」と命じます。自分たちは安住の地を得たから他の部族のことはどうでもいいというのではなく、彼らと一緒に、これからカナン占領の戦いを戦わなければなりません。しかもそれは、他の部族すべてが彼らと同様に自分たちの相続地を占領し終えるまで、すなわち最後まで、ずうっと戦い続けなければならないというのでした。結局、三部族は、ここでモーセに命じられている以上の誠実さを示します。すなわち、彼らは他の9部族の「先頭に立って」、彼らのためにカナンで最後まで戦うこととなります(民数記 32:17、ヨシュア 22:2-3)。

その時、モーセは後継者であるヨシュアに命じます。「あなたは、あなたがたの神、主が、これらふたりの王になさったすべてのことをその目を見た。主はあなたがたがこれから渡って行くすべての国々にも、同じようにされる。彼らを恐れてはならない。あなたがたのために戦われるのはあなたがたの神、主であるからだ。」(申命記 3:21-22) かつてヨシュアは、「主が私たちと共におられる」との約束通りに、必ず敵に勝たせてカナンを相続させてくださると、信仰によって告白しました。そして二つの王国を打ち破ることで、その告白が真理であることを「その目を見た」のです。それで、これからも「主はあなたがたがこれから渡って行くすべての国々にも、同じようにされる」、「彼らを恐れてはならない」と励ますのでした。

ヨシュアを励ましたついでにと思ったか、モーセは「主に懇願して」言います。「神、主よ。あなたの偉大さと、あなたの力強い御手とを、あなたはこのしもべに示し始められました。あなたのわざ、あなたの力あるわざのようなことのできる神が、天、あるいは地にあるでしょうか。どうか、私に、渡って行って、ヨルダンの向こうにある良い地、あの良い山地、およびレバノンを見させてください。」(24-25) 「懇願する」という言葉は「憐れみにすがって懸命に懇願する」という意味で、モーセがどれほど自分もカナンに入ることを切実に熱望していたかを表しています。モーセは、神が偉大であり、その威力はあまりに大きすぎて計り知ることにはできないものの、それでも少しずつ自分は悟り始めている、天にも地にも比類無き最強のお方であると、まずほめたたえます。そうして、その全能の御力をもって、「どうか、私に、渡って行って、ヨルダンの向こうにある良い地、あの良い山地、およびレバノンを見させてください」と切願するのです。神にはできないことはない、だからこの120歳という超高齢で死ぬ寸前の自分をも、悲願の地である神の約束の地カナンに入らせてください、と言うのでした。確かに、80歳のモーセに召命を与えて120歳まで生かしてくださったのみならず、何も無い、見渡す限り不毛の荒野で、四十年間、ただ天からの糧をもって養い、あらゆる危険から守り、イスラエルを霊的に指導させてくださったのは、ひとえに全能の神の力あるみわざによるものです。だからこそモーセは、この調子で、この勢いで、自分をカナンに入らせてくださいと神に「懇願」したのです。

しかし神の答えは、これを完全に蹴飛ばしてしまうものでした。「しかし、主は、あなたがたのために私を怒り、私の願いを聞き入れてくださらなかった」のです(26)。「あなたがたのために」は「あなたがたを理由(原因)に」の意味です。メリバの事件に起因しますが、それも元々はモーセが悪いわけではなく、不信仰な民たちが悪かったのだけれども、モーセまでがその責任を取らされる形で、神はモーセを怒り、モーセの願いを聞いてくれなかったのです。神はモーセに言われます。「もう十分だ。このことについては、もう二度とわたしに言ってはならない。

ピスガの頂に登って、目を上げて西、北、南、東を見よ。あなたのその目でよく見よ。あなたはこのヨルダンを渡ることができないからだ。」(26-27)「もう十分だ。これについては二度とわたしに言うな」と、神はモーセにカナン入りを懇願することさえ禁じるのですから、極めて強い否定です。この一言で、モーセのカナン入りの可能性は100%完全に消滅します。モーセの悲願は跡形もなく砕け散ってしまうのでした。その代わりに、「ピスガの頂に登って、目を上げて西、北、南、東を見よ。あなたのその目でよく見よ。」と言われ、「あなたはこのヨルダンを渡ることができないからだ」とダメ押しされてしまいます。

それにしても、モーセが死ぬ前までカナンに入りたがっていた執念も凄いものがありますが、それ以上に、神の毅然とした回答に、何とも言えず、いろいろと考えさせられます。モーセは悪くないのに、どうして不信仰な者たちの責任を取らされて、カナン入りの悲願を足蹴にされなければならないのでしょうか。その答えは、次に続く神のことばに要約されています。「ヨシュアに命じ、彼を力づけ、彼を励ませ。彼はこの民の先に立って渡って行き、あなたの見るあの地を彼らに受け継がせるであろう。」(28) つまり、神がここでモーセに期待しているのは、「ヨシュアに命じ、彼を力づけ、彼を励ませ」という、要するに次世代の養成なのです。特にここでは、次世代の指導者の養成です。これは「命じよ、力づけよ（支援せよ）、強くしろ（修理せよ）」という強意の命令形です。つまり、神の命令を教え、彼らを霊的に励まし、戒め、そうして強くすること、これが神のモーセに命じる唯一の使命なのです。モーセは今や120歳です。遺言を終えて死のうとしています。そんなモーセが、冥土の土産にカナンを見て、喜んで、自己満足に浸ったところでどうなるでしょうか。モーセが死力を振り絞ってなすべきことは、自分がカナンに入って喜ぶことではなく、カナンに入る次の世代を強めることです。先には、失敗して四十年も荒野をさまよい、一人残らず荒野で死に絶えてしまったのですから、なおのこと次世代がちゃんと育つよう尽力しなければなりません。それで神は、「もう充分だ。これについてはもう二度とわたしに言うな」と命じたのです。「もう十分だ」という言葉は「あなたに、たくさん（充分）」の意味で、「もうおまえは十分に生きた（働いた）」とも解釈できます。もう一踏ん張りして、カナン攻略を陣頭指揮させてと願うモーセに対し、「もうおまえは十分に頑張った。これ以上はもう頑張らなくてもいいよ。地上での生涯を店じまいして、わたしの所に来なさい」という意味です。そして今、120歳となって神のもとに召されんとしているモーセがなすべきは、往生際悪く自分のカナン入りを何度も「懇願」することに時間と労力を費やすことではないだろうと神は言われます。そして、カナン入りを指揮する次世代の指導者ヨシュアに「命じろ、力づけろ、強くしろ」と神は力を込めて命じるのです。

私たちキリスト教会は、次世代の養成ということを真剣に考えなければなりません。モーセのように、自分が神の約束の地カナンに入って、自分が恵まれることを願うのもいいかも知れません。でも、神がモーセに期待しておられたのは、来たるべき新しい時代の教会を担う、次の世代を養成することです。この神の期待を私たちも真面目に考えなければなりません。私が次世代の養成というのは「名ばかりのクリスチャン」を増やすという意味ではありません。そんな名ばかりの信者は、失敗しては荒野を40年さまようことを繰り返すばかりで、いつまで経ってもカナンには入れません。神に背いて荒野を四十年さまよう信者ではなく、失敗の歴史から教訓を学んで荒野を越えてカナン入りする、揺るがぬ信仰のキリスト者です。それは、この世の流れに流されない、神にあって自律した信者と言い換えることができます。あらゆる惑わしと困難の中にあっても、神のみこころを忠実にを行う人です。きちんと自分で毎日聖書を読み、正しい聖書の教理を学んで、実践します。加えて、この世の問題をしっかりと学び、この世で言われていること、行われていることを見ながら、何が正しいことか、何が間違っていることかを、聖書に照らしてきちんと自分の頭で考えて意見を言えなければなりません。そして、誰が何と言おうと間違っていることは間違っていると、誰に対しても言えなければなりません。今どういうことがこの世で行われているのか、今どういうことが目の前で起こっているのか、それを自分の頭で考えて、正しく判断しなければなりません。テレビや

マスコミが流している情報をただ鵜呑みにしているだけでは、権力者の情報操作に洗脳され、この世の流れに流されて、気がついたら悪魔の忠実な奴隷に、ということになってしまいます。

信仰とは戦いなのです。霊的な戦い、真理をめぐる戦いです。様々な情報が飛び交う中で、あらゆる悪魔の惑わしに取り囲まれながら、何が真理かを見極めなければなりません。神のみこころを知らなければなりません。何が神の喜ばれることであり、何が神の忌み嫌われることであるかを判断できなければなりません。戦える信者が必要です。悪魔と戦う信者、戦う神の民、イスラエル（‘神は戦う’の意味）、キリストの弟子とならねばなりません。いつまでも烏合の衆じゃあ…。

そして、そのようなキリスト者を養成しなければならない教会の指導者には、信徒以上に強さが必要です。なぜなら牧師の唯一のつとめは信徒に神のことばを教育することだからです。牧師というのは信徒と仲良く上手に付き合うことが仕事なのではありません。教会は馴れ合いの仲良しクラブではありません。神のことばを聞いてそれに従う集団です。そして牧師のつとめは、まずは自分が神に忠実に聞き従いながら、それを信徒に曲げずに忠実に教えることです。勝手なことを言いながら勝手に生きている「烏合の衆」の信徒たちに、神のことばを教育しなければなりません。どんなに信徒たちが勝手なことを言っても、やっても、そういういい加減な言動に惑わされることなく、神のみこころを彼らに教えなければなりません。モーセはそこで失敗しました。いつまでもあらたまらない、人々のあまりにいい加減な言動にキレて、彼らの不信仰の巻き添えを食います。それでカナン入りを逃しました（民数記 20:10-13）。

だから、牧師は強くなければつとまりません。信徒以上に学ばなければなりません。そうでなければ信徒を教育できません。この世に向かっても警告を発し、預言することもできません。とは言え、信徒を教育するために自分が学ぶといっても、牧師を教えてくれる人と考えると難しい問題です。信徒の場合には牧師が教えますが、それなら牧師は誰から学べばよいのでしょうか。ヨシュアにとってはモーセがいて、単純にモーセから学べばよかったのですが、私たち現代の牧師にとっては誰から学べばよいのかと考えると、現実、難しい問題です。モーセがいればいいのですが、モーセはいません。それで、ある人は、アメリカに学びに行ったり、私の場合には韓国に留学に行って、八木先生は英国に留学しています。それは、さらによく神から学ぶためです。そこまでして、金かけて勉強する必要があるかと思う人がいるかと思いますが、そうしなければ学べないことは本当に多いのです。そして、そこまでして、金かけて、犠牲を払って勉強して、私は、ここにいるみなさんに毎週聖書の教理を教えているのです。みなさんは、その成果だけを享受して、私たち牧師がどれだけの犠牲を払って毎週の説教を準備しているかわかってないかも知れませんが、この本当に宣教困難な日本で、時代の流れに流されず、しっかりと聖書に立って神のことばを預言するには、少なくともこれだけのことをしなければ牧師としてのつとめを果たすことができないと私自身は思っています。田舎の牧師ならそこまで必要ないだろうと言う人もいるかも知れませんが、田舎ならなおのことそうです。神から委ねられた牧師としての責任を全うするためには、なし得る限りのあらゆる研鑽が必要なのです。安上がりでいいと言うなら、神学校にも行かず学びもせずに、そう言う人が自分で牧会してみればいいと思います。

神は、次世代の指導者ヨシュアに命じろ、ヨシュアを力づける、ヨシュアを強くしろ、ヨシュアの信仰を揺るがぬ不動のものにしろ、そう力を込めてモーセに命じます。元々ヨシュアの信仰は強いものでしたが、さらに磨きをかけて強固にし、揺るがぬ不動のものにしろと命じます。これからカナン入植という新たな時代に、モーセの代わりにイスラエルの新世代をしっかりと指導するためです。この時代のあらゆる霊的な困難に耐えて、神のみこころを全うする、主に忠実なお互いとなるよう心から祈ります。